

平成23年度教育研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

自分自身を取り巻く社会環境・自然環境等に進んでアクセスし、適切にコミュニケーションを図ることのできる人間を育成するための、基礎的資質・技能を育てる教育課程、指導目標、指導内容、指導方法の研究開発。

2 研究の概要

自分自身を取り巻く社会環境・自然環境等に進んでアクセスし、適切にコミュニケーションを図ることのできる人間を育成するために、その基礎的な資質・技能を育てる教育課程、指導内容、指導方法の研究開発を行う。

具体的には、家庭科及び総合的な学習の時間、特別活動を削減して新教科「環境コミュニケーション科」を創設し、次の3つの柱から指導目標、指導内容、指導方法等を開発する。

- (1) 自分自身を取り巻く環境（社会・自然等）に進んで働き掛け、適切にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。
- (2) 自分自身を取り巻く環境（社会・自然等）に関する様々な情報を正しく受け止め、相互に関連させて理解することのできるインプット能力を育成する。
- (3) 自分自身を取り巻く環境（社会・自然等）に対して、その状況に応じた働き掛けをすることで、適切な関係を築くことのできるアウトプット能力を育成する。

3 研究の目的と仮説等

人類は、これまで自らの欲求を満たすために、様々な分野での開発・発展を遂げてきた。

しかし、それは一方で、地球温暖化等に見られるように様々な弊害も生んでおり、すでに永遠に持続可能なものではないことが明らかになっている。今こそ、我々は人類の将来に向かって、グローバルな視点から、国連が提唱するような「持続可能な開発」を進めることのできる社会の一員を育てていく必要がある。

とりわけ日本人は、様々な分野で多くの力を持ちながら、地球規模での開発・発展におけるリーダーシップや国際貢献において不十分であったという面もある。今こそ、世界の真のリーダーとして羽ばたく日本人を、数多く輩出するための教育が必要となっている。そのためには、自己中心的な発想を捨て、家庭や地域などの社会環境や、エネルギーを含めた自然環境の現状を正しく理解し、環境との適切なコミュニケーションによって調和を図る態度と技能とを育てていくことが大切であると考えた。

そこで、当校では、これまでの「エネルギー・環境教育実践校」としての取組の成果、「新潟人に学ぶ」をキーワードとして進めてきたキャリア教育、「地域と学校パートナーシップ事業」等の取組の成果にも目を向けて、新教科「環境コミュニケーション科」の創設に向けての研究を推進することとした。

(1) 研究仮説

新教科「環境コミュニケーション科」を創設し、以下の3つの視点から、指導内容や

指導方法等を研究開発し、教育内容を改善することにより、自分自身を取り巻く社会環境・自然環境に進んでアクセスし、適切にコミュニケーションを図る能力を育成することができる。

- ① 自分自身を取り巻く環境（社会・自然等）に進んで働き掛け、適切にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。
- ② 自分自身を取り巻く環境（社会・自然等）に関する様々な情報を正しく受け止め、相互に関連させて理解することのできるインプット能力を育成する。
- ③ 自分自身を取り巻く環境（社会・自然等）に対して、その状況に応じた働き掛けをすることで、適切な関係を築くことのできるアウトプット能力を育成する。

なお、本研究でねらうインプット能力とは、「自分自身を取り巻く環境（社会・自然等）に関する様々な情報を正しく受け止め、相互に関連させて理解する力」である。

単に記憶・理解するのではなく、社会や自然とのかかわりの中で、情報を自分の頭の中にある知的ネットワークに位置付けることをねらいとしている。

また、アウトプット能力とは、「自分自身を取り巻く環境（社会・自然等）に対して、その状況に応じた働き掛けをすることで、適切な関係を築くことのできる力」を意図している。相手の知的ネットワークに位置付けることを目的に、手段や内容を選択し、働き掛けることをねらいとしている。

| | 第1学年・第2学年 (コミュニケーション基礎) | 第3学年・第4学年 | 第5学年・第6学年 |
|-----------------------|------------------------------------|--|---|
| 適切にコミュニケーションを図ろうとする態度 | ○自分からかかわろうとする姿勢 ○自分で受け止めようとする姿勢 | ○自分の考えを進んで表そうとする姿勢 ○相手の考え、周りの状況を正しく受け止めようとする姿勢 | ○相手や状況に応じた距離感、間合いでかかわろうとする姿勢 |
| | ○譲る気持ちや我慢 | ○自分の立場を見直そうとする謙虚さ | ○異なる考えから新しい考えを生み出そうとする気持ち |
| | ○親切心 | ○少数の意見にも目を向けていこうとする姿勢 | ○勝敗に対する正しい受け止め |
| | ○感謝の心 | ○深謝の心 | ○畏敬の念 |
| | ○決めつけない心 | ○何事にもメリット・デメリットがあるという考え ○「古い＝×、新しい＝◎」という見方の払拭 | ○「問題の発生は、よりよい方向へと向かうための大切な手掛かりである」という考え ○大勢の言動に盲目的に従わない気持ち |
| | ○明るく、元気な声 | ○時と場に合った言動 | ○礼儀・折り目正しさ |
| インプット能力 | ○正確な読み取りや簡単な状況把握 | ○自分の思いや願いの再構成 ○社会環境、自然環境それぞれについて、循環・つながりを意識した事象の理解 ○古くから伝わっていることや人間の知恵についてのよさ、おもしろさの理解 | ○自分の思いや願いと相手の思いや願いのすり合わせ ○社会環境、自然環境相互の循環・つながりを意識した事象の理解 ○伝統文化や先端技術についての自分の生活との関係についての理解 |
| | ○簡単な状況把握に基づく言動 | ○共存しあう関係を築くことを意図した言動 | ○信頼関係を築くことを意図した言動 |

(2) 教育課程の特例

社会環境・自然環境に進んでアクセスし、適切にコミュニケーションを図る能力を育成するため、「環境コミュニケーション科」を創設する。低・中学年は年間70時間（1年生は69時間）、高学年は年間105時間とし、そのための時数は、内容的な重なり等を考慮し、家庭科や特別活動、総合的な学習の時間の一部を充てることとする。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容等

①教科

「環境コミュニケーション科」を新設することとした。

②環境コミュニケーション科の目標

環境コミュニケーション科の目標は次のように設定した。

自分自身を取り巻く環境に進んでアクセスし、適切にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、環境にかかわる課題を解決するために必要な能力（インプット能力・アウトプット能力）を育成し、持続可能な開発の担い手としての見方や考え方を養う。

目標の理解を深めるために、目標を構成している文章を分節で区切り、それぞれの意図するものについて示す。

○ 自分自身を取り巻く環境に進んでアクセスする

「自分自身を取り巻く環境」とは、自分を取り巻くすべての人・こと・ものを指す。

「環境」というと、とかく「環境＝自然環境」という受け止めをしがちであるが、環境コミュニケーション科では、環境を社会環境と自然環境からみることとし、「社会環境にも積極的に目を向ける」こととする。「進んでアクセスする」とは、自分を取り巻く環境に興味・関心をもって働き掛けることを指す。教師は、子供の発達段階や学びの履歴等により、どのような環境へのアクセスを促すのかを明らかにして、環境問題の解決に向かうことのできる意識の醸成を図る。

○ 適切にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる

「適切にコミュニケーションを図る」とは、環境問題の解決のための相互理解を図ろうとしたり、互いの関係を保とうとしたりすることを指す。自分にとってもアクセスした環境にとってもよい状態をつくりあげていこうとする姿を求める。

○ 環境にかかわる課題を解決するために必要な能力を育成する

「環境にかかわる課題」は、すべて「環境問題」と呼ぶこととし、自然環境にかかわる課題だけでなく、社会環境にかかわる課題も含むものとする。「解決するために必要な能力」とは、「インプット能力」と「アウトプット能力」の2つの能力を指す。インプット能力とは「自分自身を取り巻く環境に関する様々な情報を正しく受け止め相互に関連させて理解する力」であり、アウトプット能力とは、「自分自身を取り巻く環境に対して、その状況に応じた働き掛けをすることで、適切な関係を築く力」である。その状況に応じた働き掛けでは、発表場面、活動場面を見極めたうえでの発表や活動の内容、方法等の選択が重要となる。それゆえに、アウトプット能力の発揮には、表現力が必要不可欠であるが、自分を取り巻く環境と適切な関係を築く力であることから、相手や状況に応じた表現力の発揮が求められる。

○ 持続可能な開発の担い手としての見方や考え方を養う

「持続可能な開発の担い手としての見方や考え方」とは、次の3つを指す。

・**「折り合い」という解決観**……自分を取り巻く環境において、自分の主張ばかりをすることがない。自分の取り巻く環境において、遠慮し過ぎることもない。持続可能な開発には「自分にとっても、自分を取り巻く環境にとってもよい」という解決を図っていこうとすることが必要である。

・**「循環・つながり」という環境観**……自分を取り巻く環境には、「循環・つながり」が存在するという相対的な見方や考え方が必要である。「循環・つながり」という環境観の獲得により、自分を取り巻く環境における自分の言動の影響について実感を伴った理解が促されたり、環境問題における自分の位置が明確になったりする。このことにより、環境問題は、人ごとでないこと。そして、その解決は、一部の有識者、専門家等だけが当たるべきことではないことととらえるようになる。

・**「言動のしなやかさ**……同じ結果を求めているも、その言動により、自分を取り巻く環境にすんなりと受け入れられる時とそうでない時とがあるという意識をもち、自分らしさを損なわないようにしながらも相手や状況に応じて、何を前面に出すべきか、どれを優先すべきかを明らかにし、柔軟な言動をとっていくことが必要である。

③各学年の目標及び内容の構成（開発した単元）

ア 第1学年・第2学年

低学年では特に「コミュニケーション基礎」として、家庭生活や地域社会におけるベーシックな振る舞い方等を取り扱うこととし目標を設定した。

身の回りの環境（学級・家庭・身近な地域）での生活をよりよいものにしようとする活動を通して、環境にかかわる問題について考えていくために必要なコミュニケーション能力の基礎を養う。

内容は、「よい投げ掛けをしようとする自分」「よい受け止めをしようとする自分」「身近な環境理解と環境づくり」の3つで構成することとした。なお、それぞれの内容において開発した単元は次のとおりである。 ※< >の数字は授業時数。

【よい投げ掛けをしようとする自分】

- ・気もちをつなげるほかほかあいさつ（第1学年<10> 6月～7月）
- ・気もちがかようインタビュー（第1学年<7> 9月～10月）
- ・何が先かな（第2学年<4> 5月～6月）
- ・心のおんどと言葉のおんど（第2学年<7> 6月～7月）

【よい受け止めをしようとする自分】

- ・「たんぼぼ学校」のあいさつ名人（第1学年<10> 11月～12月）
- ・こんなときどうする（第1学年<4> 1月～2月）
- ・ことばのキャッチボール（第2学年<12> 11月～12月）
- ・さようならじゃんけんポン！（第2学年<10> 1月～2月）

【身近な環境理解と環境づくり】

- ・みなさんよろしくお願ひします（第1学年<5> 4月～5月）
- ・こんなクラスにしたいな（第2学年<5> 4月～5月）
- ・だれがやっているのかなーがっこうせいかつへんー（第1学年<7> 6月～7月）
- ・家庭学習スマイルアップ大作戦（第2学年<6> 6月～7月）
- ・だれがやっているのかなーきゅうしょくへんー（第1学年<10> 9月～11月）
- ・もっとこんなクラスに（第2学年<5> 9月）
- ・あそびにいつてくるね（第2学年<5> 10月）
- ・レッツかてべん（第1学年<7> 11月～12月）
- ・家庭学習スマイルアップ大作戦パートⅡ（第2学年<6> 11月～12月）
- ・もっとクラスを楽しくするには（第2学年<4>11月～12月）
- ・きょうしつをバトンパス（第1学年<5> 3月）
- ・中学年に向かって（第2学年<5> 3月）

イ 第3学年・第4学年

身近な環境とかかわりを持ち、環境についての課題を明らかにするとともに、今の自分にあつた解決に向けての活動に取り組むことを通して持続可能な開発の担い手としての見方や考え方を養う。

内容は、「自分と学級（学校）生活」「暮らしとエネルギー」「人々の生産・消費活動」「人間の知恵と伝統文化」の4つで構成することとした。なお、それぞれの内容において開発した単元は次のとおりである。 ※< >の数字は授業時数。

【自分と学級（学校）生活】

- ・3年生のクラスづくり（第3学年<5> 4月～5月）

- ・4年生のクラスづくり（第4学年<5> 4月～5月）
- ・こんな4年生になりたいな（第3学年<5> 3月）
- ・高学年に向かって（第4学年<5> 3月）

【暮らしとエネルギー】

- ・音エネルギーでココロ 満タン（第3学年<15> 11月～12月）
- ・新潟の町で安全に暮らすために（第4学年<22> 11月～12月）

【人々の生産・消費活動】

- ・堀のまちわたしたちのたんぼぼの町（第3学年<15> 9月～10月）
- ・古町スイーツを作ろう（第4学年<15> 9月～10月）

【人間の知恵と伝統文化】

- ・遊VIVA ドン山（第3学年<15> 6月～7月）
- ・相手を思いやる心 –古町芸妓から学ぶ–（第4学年<15> 6月～7月）
- ・私たちの町 新潟（第4学年<8> 1月～2月）

ウ 第5学年・第6学年

自分を取りまく環境の関係性に着目して、環境にかかわる課題を明らかにし、その解決に向けての活動に取り組むことを通して持続可能な開発の担い手としての見方や考え方を養う。

内容は、「自分と学級（学校）生活」「暮らしとエネルギー」「人々の生産・消費活動」「人間の知恵と伝統文化」の4つで構成することとした。なお、それぞれの内容において開発した単元は次のとおりである。 ※< >の数字は授業時数。

【自分と学級（学校）生活】

- ・5年生の学級づくり（第5学年<20> 4月～5月）
- ・6年生の学級づくり（第6学年<20> 4月～5月）
- ・卒業おめでとうキャンペーンを成功させよう（第5学年<20> 2月～3月）
- ・感謝の気持ちを伝えよう（第6学年<20> 2月～3月）

【暮らしとエネルギー】

- ・私たちのピカッとプロジェクト（第5学年<15> 11月～12月）
- ・緑のカーテン（第6学年<20> 6月～9月）
- ・水と油から見える世界（第6学年<20> 11月～12月）

【人々の生産・消費活動】

- ・リサイクルでビフォーアフター（第5学年<20> 6月～7月）
- ・現代の社会と未来の社会（第6学年<15> 1月）

【人間の知恵と伝統文化】

- ・お茶の心は和の心（第6学年<15> 6月～9月）
- ・新潟小ピカピカ大作戦（第5学年<20> 9月～10月）

(2) 研究の経過

| | |
|------|---|
| 第一年次 | <ul style="list-style-type: none"> ◎環境（社会・自然等）に対する態度やコミュニケーション能力にかかわる子供の実態分析 ◎一年次研究全体計画の作成 ◎先行研究・実践等の分析及び検討 ◎新設教科「環境コミュニケーション科」のカリキュラム作成（目標・指導内容・配列等） ◎新設教科「環境コミュニケーション科」の試行（授業研究による指導方法 |
|------|---|

| | |
|------|--|
| | <p>の検討と地域教育コーディネーターを活用した実地体験の集積)</p> <p>○研究計画及び研究内容の見直し</p> |
| 第二年次 | <p>◎二年次研究全体計画の作成（一年次計画の修正）</p> <p>◎「環境コミュニケーション科」のカリキュラム作成（目標・指導内容・配列等）の点検、見直し</p> <p>◎作成した年間プランに基づく「環境コミュニケーション科」の実施（授業研究による単元構成、指導法等の検討）</p> <p>○環境（社会・自然等）に対する態度やコミュニケーション能力にかかわる子供の実態分析・評価</p> <p>◎中間研究発表会の実施</p> <p>○「環境コミュニケーション科」から見た諸活動、諸行事の見直し</p> <p>○研究計画及び研究内容の見直し</p> |
| 第三年次 | <p>◎三年次研究全体計画の作成（二年次計画の修正）</p> <p>◎「環境コミュニケーション科」のカリキュラム修正</p> <p>○「環境コミュニケーション科」の実施（授業研究による指導方等の検討と地域教育コーディネーターを活用した実地体験の集積）</p> <p>◎研究開発の評価と成果発表のための研究発表会の実施</p> <p>◎他校での実施に向けた検討・評価、実践事例の公表、提言の実施</p> |

(3) 評価に関する取組

| | |
|------|--|
| 第一年次 | <p>○「環境コミュニケーション科」のカリキュラム（目標・内容・単元構成等）に関する識者による外部評価</p> <p>◎識者による授業研究（指導方法）の外部評価</p> <p>○環境（社会・自然等）に対する態度やコミュニケーション能力にかかわる子供の実態分析による数値評価（年度末・全学年）</p> |
| 第二年次 | <p>◎「環境コミュニケーション科」のカリキュラム（目標・内容・単元構成等）に関する識者による外部評価</p> <p>○識者による授業研究（指導方法）、評価方法の外部評価</p> <p>○環境（社会・自然等）に対する態度やコミュニケーション能力にかかわる子供の実態分析による数値評価（年度末・全学年）</p> <p>◎中間発表会参会者による評価</p> <p>○活用型問題の作成・実施による客観的数値に基づいた成果の判定</p> |
| 第三年次 | <p>◎「環境コミュニケーション科」のカリキュラム（目標・内容・単元構成等）に関する識者による外部評価</p> <p>○識者による授業研究（指導方法）、評価方法の外部評価</p> <p>○環境（社会・自然等）に対する態度やコミュニケーション能力にかかわる子供の実態分析による数値評価（年度末・全学年）</p> <p>◎研究発表会参会者による評価</p> |

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

①児童・生徒への効果

当校の学校評価（年間2回実施。1学期末<9月>、2学期末<2月>）の「学力向上<知>」の評価項目については、研究開発学校としての取組を前面に出し、評価を行ってきた。

児童への効果について、第2年次、第3年次の学校評価のデータから測定した。すべての項目において、80%以上の達成率を期待した。「適切にコミュニケーションを図ろうとする態度」「インプット能力」に比べると、「アウトプット能力」の達成率が低くなっている。これは、アウトプットをする前提となるインプットに問題があったり、アウトプットをする際の状況や相手の設定に問題があったりしたためであると考えられる。

ア 「適切にコミュニケーションを図ろうとする態度」について

環境コミュニケーション科の1単元以上で教師・子供のそれぞれの評価により行った。全学年、80パーセント以上の達成率を期待した。平成22年2月の第5学年を除き、すべて、80パーセント以上の達成率となった（表1）。

平成23年度の「コミュニケーション基礎」においては、はじめは、恥ずかしさが出てしまい、「長いあいさつ（あいさつの言葉に続けて会話をする）」をすることができなかった1年生が、学習が進むにつれて、「長いあいさつ」をするようになってきた。保護者や地域の方々からの励ましの言葉により、一層の意欲の高まりが見られた。また、第2学年では、どの言葉が「温かい言葉」なのかが分かり、自分の生活の中で、温かい言葉を使用する子供が増えた。

第3学年以上では、学校近隣の自然を生かして遊びをつくり、リサイクルに興味をもってその活動の実際に取り組んだりした。また、学習活動を進めていく際に他者の意見を適切に受け止めようとする姿が多く見られるようになった。

イ 「インプット能力」について

環境コミュニケーション科の1単元以上で教師・子供それぞれの評価により行った。全学年、80パーセント以上の達成率を期待した。平成22年2月の第2学年を除き、すべて80パーセント以上の達成率となった（表2）。

平成23年度の「コミュニケーション基礎」では、第1学年において、自分が使った「長いあいさつ」と相手が使った「長いあいさつ」とを関連付けて、「長いあいさつ」についての振り返りに取り組ませ、どのような「長いあいさつ」がよいのかをとらえていった。

また、第2学年では、心を「鉄球」、周りの言葉を「水」に置き換えて、周りの温度により、心が温まったり、冷たくなったりすることと関連付けて、言葉の温度をとらえた。

表1 「適切にコミュニケーションを図ろうとする態度」の評価の推移

| 学 年 | （%） | | |
|------|--------|-------|--------|
| | H22/10 | H22/2 | H23/10 |
| 第1学年 | 89 | 92 | 92 |
| 第2学年 | 91 | 88 | 81 |
| 第3学年 | 94 | 83 | 96 |
| 第4学年 | 100 | 95 | 98 |
| 第5学年 | 97 | 72 | 97 |
| 第6学年 | 94 | 100 | 93 |

表2 「インプット能力」の評価の推移

| 学 年 | （%） | | |
|------|--------|-------|--------|
| | H22/10 | H22/2 | H23/10 |
| 第1学年 | 91 | 97 | 88 |
| 第2学年 | 92 | 78 | 95 |
| 第3学年 | 95 | 86 | 93 |
| 第4学年 | 100 | 96 | 97 |
| 第5学年 | 88 | 83 | 93 |
| 第6学年 | 80 | 100 | 85 |

第3学年は、自分たちが体験した自然遊びと自分たちが今楽しんでいる遊びとを合わせて新たな遊びの創作に取り組んだ。

第4学年は、地域の活性化を地域をイメージしたスイーツの開発により叶えようとした。複数の企画書を基に、一つの商品を作り出していく過程において、それぞれの企画書の関連付けた理解がなされた。

第5学年は、調査活動により、各家庭のゴミや使われないまま放置されているものの具体を明らかにし、そのことから生活の中での無駄がどのように発生するのかをとらえていった。

第6学年は、茶道における振る舞いと今の生活における振る舞いとを関連付けて、人をもてなす心とはどのようなものなのかを明らかにしていった。

ウ 「アウトプット能力」について

環境コミュニケーション科の1単元以上で教師・子供それぞれの評価により行った。全学年、80パーセント以上の達成率を期待したが、「適切にコミュニケーションを図ろうとする態度」「インプット能力」の達成率と比べると低い結果となった(表3)。

平成23年度の「コミュニケーション基礎」では、第1学年において、相手を意識して、言葉を変えてあいさつをしている様子が伺えた。また、あいさつの種類も増えた。

第2学年では、伝えたいことを冷たい言葉で伝えるのではなく、温かい言葉に変える「変身言葉」で表す姿が見られた。

第3学年では、国語科の学習における説明文教材を自分たちが作った「遊びの説明書」の型を利用し、自分たちの遊びを1年生にもよく分かるように表し方の工夫を行う姿が見られた。

第4学年では、自分たちが発案したスイーツの企画書のどこをアピールしたらよいのかを実際に製造にあたる店側を意識して説明することができた。

第5学年では、リサイクルプランを互いに評価しあう提案会において相手に自分のプランを説明した。しかし、相手や状況に応じて表現することの必然性を子供に十分にもたせることができない提案会となってしまう、アウトプット能力を発揮する場面の設定に工夫が必要であった。

第6学年では、茶道のおもてなしの心を自分の家でどのように実践するのかを各家庭の状況や相手による「おもてなしプラン」を立て、各家庭での実践活動に取り組んだ。

②教師への効果

学年(3学級)単位での新しい単元の開発に意欲的に取り組む姿勢が見られた。各学年ごとに構想した単元については、各学級の授業における子供の事実を出し合いながら、その構成の修正がなされていった。

また、これまで行ってきた学校行事、児童会行事についても、環境コミュニケーション科からの点検・見直しを図る姿もあった。

目指す子供の姿を明確に想定し、その姿を促すための教師の働き掛けを構想することの大切さに目を向ける姿が多くなった。また、行った授業における働き掛けについて、子供の姿から分析的に見ていこうとする姿がより一層強くなった。

従前にはない新教科を創り上げることにより意欲をもって取り組んでいる職員が多く、他

表3 「アウトプット能力」の評価の推移

| 学 年 | (%) | | |
|------|--------|-------|--------|
| | H22/10 | H22/2 | H23/10 |
| 第1学年 | 89 | 88 | 78 |
| 第2学年 | 73 | 75 | 82 |
| 第3学年 | 72 | 96 | 89 |
| 第4学年 | 94 | 98 | 95 |
| 第5学年 | 66 | 86 | 62 |
| 第6学年 | 77 | 100 | 80 |

校の研究会への参加、視察が積極的になされた。

12月2日（金）の研究発表会に向けて、全職員一丸となって公開授業等の準備を進めることができた。

③保護者等への効果

環境コミュニケーション科の学習は、実践場面を日常生活に求めるところが多く、保護者や地域の方々の参画をお願いすることが多かったが、新教科の意図に共感をしてもらい、積極的な参加がなされた。

P T A活動において、これまで行われてきた「バザー・不要品販売」の活動のより一層の充実がなされるとともに、自転車発電によるクリスマスイルミネーションの点灯が保護者の企画でなされたり、学年行事の内容も親子で環境にかかわる学習をする企画が見られたりしている。環境コミュニケーション科の創設により、保護者も子供とともに環境に目を向けることが多くなっている。

例年2月に開催している学習発表会では、環境コミュニケーション科の取組を保護者や地域の方々に伝えてきたが、当校の取組を支持する感想が多く寄せられた。

学習発表会の感想（保護者・地域の方々）

- ・子供がここまで環境のことについて学習を進めていることに驚かされました。それと同時に、このような学習がこれからとても大切になっていくことを強く感じました。
- ・子供が地域のことを大切にしていることが子供の歌からよく伝わってきました。
- ・このような学習をきっかけに、家でもやれることについて子供と話をしてみたいと思いました。
- ・どの学年も自分たちの学んだことを堂々と発表していてよかったと思います。

また、12月2日（金）に開催した研究発表会では約400名の教育関係者の参加があった。研究発表会のアンケートでは、当校の取組について、90パーセント以上の参加者の方々から「大変参考になった」「参考になった」という評価を得た。

研究発表会の参会者の声（アンケートより）

- ・未来を見据えて、現在の自然・社会と子供たちとのかかわりを環境とのコミュニケーションととらえ、研究を深めてこられたことに新しい視点を学ばせていただきました。
- ・子供の事実を出発点とし、これからの社会を生き、また新たに創っていかねばならない子供たちに必要な力について真剣に検討し、教職員が一体となってここまでこられたことに深い感銘を受けました。
- ・はじめに教科ありきでなく、子供に求められる現代社会・自然環境の課題を基に設定された「環境コミュニケーション科」の主旨に賛同します。地域や自校の子供の課題と結び付けてとらえるようになると教科の重みがより一層増すのではないかと思います。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

①実施上の問題点

他の教育活動等との兼ね合いの中で、諸活動、諸会議の設定を厳選して研究を進めてきた。

このことにより、研究活動による日々の多忙感は解消された。しかし、その反面、研究内容についての議論が十分に行えないこともあり、バランスをどのように取るかということに課題が残った。

また、児童会行事（児童会祭り）の開催時期を変更せざるを得ない状況となり、その諸準備にかかる時間が例年よりも少なくなってしまうという状況を招いてしまうこともあった。

②今後の課題

○環境コミュニケーション科の年間プランの精度をあげる

作成した年間プランについて、「他教科との関連性」「各学年の系統性」をより一層明確にする。また、各種行事（学校行事・児童会行事）についても環境コミュニケーション科の授業から活動内容等についての点検・見直しを進めていく。

○子供の姿から開発した指導内容・指導方法等の有効性の検証を継続する

新教科「環境コミュニケーション科」は、「コミュニケーション基礎（低学年）」と第3学年以上の「環境コミュニケーション科」とで構成されている。これまでの3年間の研究において、「コミュニケーション基礎」を学んだ子供（現第3学年まで）がこの後、環境コミュニケーション科の学習にどのように取り組んでいくのか、第6学年まで追跡する。このことにより「コミュニケーション基礎（低学年）」の指導内容・指導方法等の点検・見直しを図る。

○学校教育で「持続可能な社会」を目指すことの大切さを地域社会に浸透させる

「持続可能な社会」を目指すことの重要性を地域社会に浸透させることを、新教科「環境コミュニケーション科」の授業実践により試みる。地域コーディネーター、PTAとの連携をさらに強化し、地域社会の教育力向上も視野に入れた環境コミュニケーション科の改善を目指す。

○授業のユニバーサルデザイン化からのアプローチを進めていく

本年度より着手した特別支援学級における単元開発を今後も進めるとともに、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒とのかかわり」にも注目し、学級の環境づくりをどのように進めるか、個々のインプット能力、アウトプット能力のよりよい発揮の仕方はどうあるべきか等についても研究開発を進める。

新潟小学校 教育課程表（平成23年度）

| | 各教科の授業時数 | | | | | | | | | 道徳 | 外国語活動 | 総合的な学習の時間 | 特別活動 | 環境コミュニケーション科 (低学年はコミュニケーション基礎) | 総授業時数 | |
|------|----------|-----|------|-----|-----|-----|------|----|-----|-----|-------|-----------|------|-----------------------------------|-------|-------------|
| | 国語 | 社会 | 算数 | 理科 | 生活 | 音楽 | 図画工作 | 家庭 | 体育 | | | | | | | |
| 第1学年 | 306 | 0 | 136 | 0 | 102 | 68 | 68 | 0 | 102 | 34 | 0 | 0 | 0 | -34 | 69 | 850 +35 |
| 第2学年 | 315 | 0 | 175 | 0 | 105 | 70 | 70 | 0 | 105 | 35 | 0 | 0 | 0 | -35 | 70 | 910 +35 |
| 第3学年 | 245 | 70 | 175 | 90 | 0 | 60 | 60 | 0 | 105 | 35 | 0 | 35 | 0 | -35 | 70 | 945 |
| 第4学年 | 245 | 90 | 175 | 105 | 0 | 60 | 60 | 0 | 105 | 35 | 0 | 35 | 0 | -35 | 70 | 980 |
| 第5学年 | 175 | 100 | 175 | 105 | 0 | 50 | 50 | 15 | 90 | 35 | 35 | 45 | 0 | -25 | 105 | 980 |
| 第6学年 | 175 | 105 | 175 | 105 | 0 | 50 | 50 | 10 | 90 | 35 | 35 | 45 | 0 | -25 | 105 | 980 |
| 計 | 1461 | 365 | 1011 | 405 | 207 | 358 | 358 | 25 | 597 | 209 | 70 | 160 | 0 | -120 | 488 | 5645 +69 |